

ビジネスインタビュー
ヒットの兆し
Made in Gifu



柳ヶ瀬商店街のほぼ中央あたりにある昭和59年開業の「ロイヤル劇場」。入口の看板にある往年の銀幕スターたちの笑顔に誘われるよう4階へ。

ここでは、全国的に貴重な存在となつた「フィルム映画」を専門に上映がなされています。

それを支え続ける人がいます。

映画館映写技師 橋本義信さん 74歳。

映写室という「バックグラウンドからこの道一筋に50余年。

老朽機器の整備・劣化した「フィルム」を卓越・熟練された技術で改修、

再生復活させながら、これまでに約一万本を超える物語を銀幕に映し続けています。

映画の世界に憧れ、育つ

橋本さんは、昭和17年、下呂市小坂町の映画館の次男として生まれました。

戦後、混乱と貧困の中で苦しい生活を余儀なくされた日本において、映画産業はいち早く復興しました。

映画の中の世界への「夢」や「憧れ」は、身近な娯楽を何より必要としていた人々の糧となり、日本の復興・高度成長の原動力ともなりました。

橋本さんは、そんな映画を贅沢なほど観て、関わって育ちました。

「私が子どもの頃は、映画のフィルムにはまだ『音』が

なく、スクリーンの横には活動弁士、いわゆる映画の説明者がいました。その語りが楽しくてね」こうして橋本さんは、「映画」の世界にごく自然に入つていき、中学を出てからすぐには映写技師の資格を取り、映画館を手伝うようになりました。

昭和41年、大きな映画館で仕事がしたいと、知り合いを辿つて岐阜へ。当時、岐阜でいちばん大きな映画館だ

った「岐阜劇場」で働きはじめました。

全盛期の柳ヶ瀬には全部で13もの映画館が軒を連ねました。まさに昭和の岐阜・柳ヶ瀬は「映画」とともに復興・繁栄。岐阜の一大文化を築き上げてきました。

「うちも連日大入り満員でね。どれだけ忙しくても毎日が楽しくて、楽しくて」

そう、満面の笑みで、当時を振り返ります。

「フィルム映画を再生させる『奇跡の技』」

しかしその後、映画の世界は急速なデジタル化、シネマコンプレックスの増加により、フィルム映画に関わるほとんどのものが姿を消していきました。

「長いこと柳ヶ瀬に『生かせて』もらつてきましたからね」かつての柳ヶ瀬のようにとはいかなくとも、少しでも多くの方が柳ヶ瀬に足を運ぶきっかけになれば」。

これは、橋本さんから柳ヶ瀬への心ばかりの「恩返し」。今後も映画という世界を通して、岐阜の、柳ヶ瀬の古き良き時代と今、そしてこれからを繋ぐ「まち先案内人」として、商店街をはじめ岐阜市の中心市街地活性化にも努めています。

今や、フィルム映画を上映することは不可能に近い状態。しかし橋本さんは、こつこつと替えの部品もない老朽機器を整備し、脆くなつたり目で見てわからないようななフィルムの傷を指先の感覚のみで繋ぎ合わせ、「フィルムでしか残っていない」貴重な映画を上映可能に甦らせていきます。

それはまさに、真の映写技師だからこそ成せる「奇跡の技」。

橋本さんの指先は、フィルムを修復する際の油による細かな荒れ傷でいっぱいです。

「これは、私の歴史みたいなもんですね」

そんな橋本さんが修復を手掛けた35mmフィルムは、「映写が途切れない」と、全国の多くの映画関係者から感謝の声が届くほどです。

「つい最近も、満席になりましたよ」

今日もロイヤル劇場には、映画との大切な思い出の名時間ひどきを楽しみに、岐阜はもとより日本各地から昭和の名作映画ファンが訪れます。

映画を通して、柳ヶ瀬に賑わいを

そして今、橋本さんは柳ヶ瀬の賑わい創出の一助となるべど、子どもから大人まで、幅広い世代の方々を対象にした「フィルム映画の舞台裏」の社会見学に尽力しています。

普段は入ることのできない映写室の見学、橋本さんが語る映画にまつわる今昔物語に、子ども達は興味津々、フィルム映画を知る世代の大人们には懐かしさと感動をもたらし、毎回大好評です。

「フィルム映画は、生きているんです。上映できる場所があり、映画を楽しんでくれるお客様がある限り、私はこの場所にいます」

そう映写機の傍らで、静かに微笑みます。

映写機のまわる音は、

「カタカタ カタカタ」と、
映写室に響き続けます。

今最も長く、そしてどこか心地よく

映写室に響き続けます。